

青年期後期男性のアニマについての検討

— MSSMに得られた物語に基づいて —

藤 内 三 加*

A study on anima of the men for late adolescence

— according to stories of MSSM —

Mika Tounai

要 旨

本研究の目的は、MSSM法から得られた物語にみられるアニマが4回のMSSM法の中でどのように変容しているかを検討することである。今回、1つの事例（20代前半 男性）を取り上げて、MSSMの物語からみられるアニマの変容について検討した。本事例では4つの物語が創造された。その中で「尖った描線」に投影した「僕」とアニマのやりとりが現れ、「僕」の問題と積極的に向き合うプロセスが認められた。「僕」が物語の中で積極的にアニマと関わる中で、Aさん自身の問題が浮上しその問題に向き合うことで、アニマとの関わり方やアニマイメージが変容していった。

本事例の結果から、心理カウンセリング場面でクライアントがMSSMの「尖った描線」に投影したモチーフを物語の中で能動的に使うことが心理的変容を促進させるために重要であることが示唆できた。

キーワード：MSSM法、アニマ・アニムス、変容、物語、能動的想像

I はじめに

MSSM（交互ぐるぐる描き物語統合法：Mutual Scribble Story Making）とは、セラピストとクライアントが交互にスクイグルをし、そこに投影された様々な絵をクライアントが統合し、最終的に物語として語ってもらう芸術療法の一技法である。

今日、MSSMに関する研究は事例研究が多く、治療促進的な効果が報告されているが、統計的手法を用いた調査研究は未だ少ない。また、臨床場面でMSSMが実施される場合でも、単にマニュアル（手続き）どおりに理解して導入しているように思われるケースも少なくない。セラピストの役割は、MSSMを用いてクライアントを査定するだけでなく、クライアントが何かを感じとり洞察を深めるように働きかけて、最終的にはクライアントが元気になるように心理的援助をすることである。具体的に言うと、セラピストがやみくもに誘発線や誘発線からの投影をす

平成20年9月26日受理 *大阪府心療内科

るのではなく、クライアントの描画表現が円滑に促進しやすくなるように、セラピストが投影したいくつかの思いつきを選択して描いたり、誘発線を描いたりすることが臨床的に洗練された技法の用い方であると思う。

老松 (1993, 2004) は、「無意識由来の諸内容に意識ないし自我が積極的に関与しますと、その分、意識の領域の拡大が可能になってくるわけですが、特にそれらの諸内容をひとつの物語として構成するという関与の仕方をしますと、意識のなかでの収まり具合がよくなり、次なる展開へもつながりやすくなる」と、イメージの中でのアクティブな自我の重要性を述べている。

藤内 (2007) は、MSSMの「尖った描線」に投影したモチーフを物語の中に能動的に使うことが、心理カウンセリング場面でのクライアントの心理的変容を促進させるために重要であることを述べている。

本研究では、修士論文での調査研究で調査に協力した男性調査対象者11名のうち、1名の事例をとりあげることにした。その中でも主に、MSSMの物語に焦点をあて、調査対象者のアニメの変容について検討していく。

Ⅱ 事例提示

ここでは、実際MSSMに自主的に協力してもらった11名の男性調査対象者のうち1名の調査対象者の4回のMSSM法を紹介する。今から事例的研究として紹介する調査対象者を選んだ理由としては、「尖った描線」に投影したモチーフを主体的に物語に統合できているところや、MSSMやインタビューの中で、情緒が表出しており、調査対象者自身も積極的に感情面について考察を深めているところからである。週1回50分 (MSSM30分、インタビュー20分) で、MSSMを実施し、大学内にある洋室6畳程の静かな教室を使用した。MSSMの中で、筆者は「尖った描線」を調査対象者に提示した。1回のMSSMの中で2週目、3週目あたりに「尖った描線」を提示した。

1 事例のプロフィール

Aさん 男性 20代前半 大学院生

筆者がAさんに初めて出会った時の印象を簡単に述べておくことにする。Aさんは標準的な背丈の男性で、痩せ型であった。顔の輪郭は、細長い。目鼻は小さく、色白で線の細い感じの顔立ちである。髪型はやや長めの黒髪で、髪の毛先をねぐせのような感じでニュアンスをつけていた。服装は襟付きのカッターシャツで、淡いピンクや紫、小さな花柄のものが多かった。甘い物が好きで、飲食物を片手に持って毎回来室していた。声は標準的な低さで、小さい。話し方は、少しゆっくりめの口調である。対人関係の作り方は、人を笑わせようと話をわざと大げさに言ったり、嘘をついてみたり、突然関連性のない内容のテレビの一コマを会話に入れてみたりする。Aさんは、人から注目をあびたいという願望があると他者から感じるような変わった言動をすることが多かった。Aさんを知る人からは、このようなAさんの特性を理解し、Aさんに場面にそぐわない奇異な言動があっても、「いつものこと」だと思い、気にせず話を流すようであった。しかし、

筆者は、Aさんの言動は、どこか憎めないところがあった。それは、Aさんが他者との関係を無視しているというよりも、他者のことを気にして発した言葉であったり、他者にあるがままの自分を受け入れてもらうことにためらいがあるような感じがあったからである。

2 MSSM法実施

(1) 第1回目の実施状況

X年Y月Z日

Aさんの初回の様子を少し述べておきたい。初回というのも関係しているのか、Aさんは、待ち合わせ場所がどこかわからなくなり、緊急連絡先を知りながらも直ぐに連絡をとることはしないで、約束時間よりも10分ほど遅れてきた。またMSSMの中では、Aさんの作業を黙って見守っている筆者に対して「何か歌を歌ってくださいよ〜。」などの発言があった。これらの言動から、筆者はAさんが緊張しているのを感じとり、「MSSMをしながら、話をしましょうか。」とAさんに聴いてみたり、何に見えるかなどのゲーム感覚でやりとりをしようと働きかけていた。Aさんは筆者との会話やMSSMのやり取りの中で笑ったり、Aさんが投影したモチーフについて思いついたことを自発的に話したりなど、少しずつではあったが、Aさんは緊張が和らがりリラックスしてMSSMをしていた。

①Aさんの物語

モチーフ Aさんは「 」、筆者は〈 〉
で記す。

モチーフ：「日本の夜明け」〈貝〉
「海面にうつつたヨット」〈カップル
誕生〉「イマジネーション」(Figure 1
参照)

とんがった描線 水面にうつつたヨ
ット



Figure 1

*物語の中の誤字・脱字は、Aさんの
書いた物語をそのまま書き出している。

(下線はモチーフを示している)

僕(水面に映ったヨット)はずっと前からここに浮かんでたんだ。ずっとずっと続く青の中に。ある日僕は白の中に放り込まれた。そこにはらせん状の少しなつかしいもの(貝)が、いくつも転がっていた。僕は白の中で動けなくなったまま、ほんやり速くを見たんだ。丁度、緑の中から赤が生まれていた。キレイな赤(日本の夜明け)。僕の中でその赤に入りたい、押さえ切れない欲望が込みあげてくる。あの赤の向こうに、誰かがまってる(カップル誕生)気がする。灰色の穴を開けたまま、ムラサキの僕(イマジネーション)は立ち上がった。

②物語の内容とそれに基づく筆者との対話

物語の内容としては、非常に抽象的な表現が多く小説を読んでいるかのようなのである。しかし、筆者は、Aさんの内面が非常に良く表れているように感じた。僕は尖った描線に描かれた「水面に映ったヨット」である。尖った描線から見えたモチーフを主人公として描かれているということは、主体的、能動的に物語に使っていることがわかる。Aさんは、インタビューの中で物語に出ている「僕」は「Aさん自身」のことであると語っていた。水面に映ったヨット（僕）がなつかしいもの（貝）の中に入り、ほんやりと遠くをみると、夜明けの風景が目の前に広がっている。僕は赤色（朝日）に入りたいという欲望が込み上げてくる。それは、赤色（朝日）の向こうに誰かが待っている気がするからである。灰色の穴をあけたまま紫の僕（僕のイメージネーション）は立ち上がったという話の展開であった。

Aさんの物語は、自己内省をテーマとしたものであった。筆者はその中でもAさんの中にあるアニメに焦点をあてることにした。その理由としては、話のやりとりの中に異性の話や物語の中にも「誰かが待っている～」というストーリーになっているので、Aさんの中のアニメについて話し合うことに意味があると感じたからである。

以下は物語を書いた後の話のやりとりである。

Aさんは「 」、筆者は〈 〉で記す。

〈物語の内容なんだけれど、どのような話なのか詳しく教えてくれるかな。〉

「はい。…なんか緊張する。」

〈緊張してるのね。どんな感じかな。〉

「自分のことを言葉で表現するのはできるけれど、それを相手に分かるように伝えられるかどうかと思うと…。」

〈相手に分かってもらえるように自分のことを伝えるのは、簡単なことではないね。わかってもらいたいと思うほど緊張してしまうよね。Aさんはとてもユーモラスな感性をもっていると思う。でも、Aさんの思っていることや考えていることを相手に伝えようとしても、なかなかそれが伝わっていないことをAさんは日頃から感じとっているよね、どうかな。〉

「はい、そうです。」

〈自分の思っていることを相手に分かってもらえるように、自分の言葉で説明することは、Aさんのこれからのテーマなのかもしれない。それをこれから少しずつで良いので、一緒に努力してみないかな。〉

「そうですね。緊張しますが、頑張ってみます。…僕は、水面に映ったヨットなんです。だから、僕は海の中にいて、そして貝の中にいて…。」

〈僕はヨットではなく、水面に映ったヨットなのね。それって、ヨットではなく水でもない。また僕は貝の中にもいるのね。それって、いろんなものに流動している感じに思うけれどどう？〉

「はい。僕は何者でもないんです。移り変わっていくというか…貝の中にいるときは、なつかしさを感じていました。」

〈貝はAさんにとってなつかしいものなんだね。それは貝のどういうところからそう思うの？そ

れとも、何かエピソードがあるのかな。)

「貝は…昔、実家にいたときよく集めていたんです。おばあちゃんが。」

〈Aさんではなく、おばあちゃんが貝を集めていたの?〉

「はい。よくもらいました。だから、貝は僕の手の届くところにあるものっていう感じなんです。そして、なつかしい中に僕はぼんやりと遠くをみていると、緑の向こうに真っ赤な赤があり、そこへ行きたいと思って立ち上がるんです。」

〈赤というのは、Aさんにとってどのようなイメージなのかな。また、赤のところへ入りたいという欲望が込み上げてきたのはどういうところからそう思ったのかな。〉

「赤…なんだろうな。赤いところに入りたいと思ったのは、そこに誰かが待っている気がしたから。」

〈赤いところに行くと、誰かが待っている気がしたのね。待っているのは…。〉

「何だろうなあ…僕の心の中にある女性かな。」

〈Aさんの心の中の女性ね。その女性ってどのような感じの人なんでしょうね。〉

「どうなんだろう…優しい感じかな? まだよくわかんないや。待っているというより、そこにいるという感じかも。」

(2) 第2回目の実施状況

X年Y+1月Z+7日

今回は、遅刻せずに部屋に入室してくる。チョコレートの入ったコーヒーを飲みながら入室してくる。MSSMでも、Aさんは、クイズ司会者の話の仕方をしたりなど非常にリラックスした様子であった。

①Aさんの物語

モチーフ：〈ネックレス〉「一万年前と同じ」〈スタンドグラス〉「極楽鳥の羽」〈卵を抱きかかえる女性〉「魚のアクセサリ」(Figure 2参照)
とんがった描線 スタンドグラス

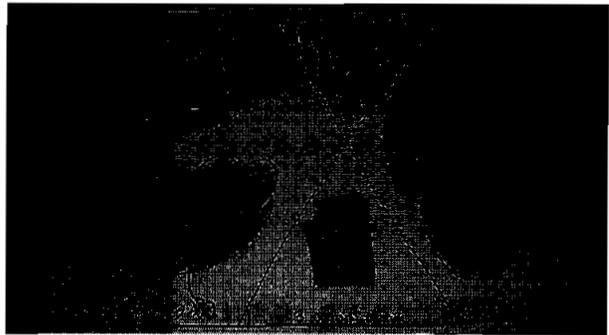


Figure 2

最初に展示されていたのはネックレスだった。見た事の無い石をキレイな石でとめたネックレス。次に見たのは小さな模型だった。だ円形の

建物に夕日が当たっているところだ。ネームプレートには知らない国の名前。多分、行くこともないだろう。その後も復元されたスタンドグラスや、その遺跡の近くで発見された絶滅した鳥の羽を見た。特別展示コーナーの出口に近づいた時、僕の目に一枚の絵が飛び込んで来た。卵を抱える女性の絵が縦長のガラスケースに展示されていた。何でだろ、ずっと見ていたらいけない気

がして、僕は出口に向かった。帰りに買った魚のストラップが、僕のポケットから出てブラブラゆれていた。

(3) 第3回目の実施状況

X年Y+1月Z+14日

#3では、時間通りに来室するものの、Aさんの様子がいつもと違うことに気がつく。Aさんは怒りや疑いを抱えているような印象に見えた。筆者はAさんの異変にすぐに気づき、MSSMをする前にAさんに筆者の感じていることを話し、Aさんと話す必要を感じた。

Aさんも筆者と同様、話をしなければと思っていたのか、Aさんから話を切り出す。その内容とは、#2と#3のMSSMの間、外で偶然に筆者とAさんが会ったことであった。Aさんは交際している恋人とのデート中で、筆者はある男性と一緒に歩いているところであった。その時は、不自然さが残らないよう、軽く会釈して別れたのだが、Aさんは、筆者と一緒にいた男性が、筆者の恋人でないかと思ったようで、「一緒にいた男性と付き合ってるんでしょ？」と何度も繰り返していた。この時のAさんは非常に感情的になっており、まるでアニメに取り憑かれているようであった。筆者は、このことに関して答えるのではなく、外で遭遇した時のAさんとAさんの恋人との間に何かあったように感じたので、そのことを素直に伝えることにした。すると、恋人から、筆者のことを訊かれ、Aさんが素直に話すと、恋人が異性と個室で2人きりになっていることに対して非常に怒ってきたというものであった。Aさんにとって、筆者は、年の近い異性である。個室で作業をすることは、非常に性的な異性への意識が高まる。また、筆者との関わりは、Aさんや恋人にとっても、不安をかきたてるものになるのも無理はないように感じた。筆者は、Aさんが感じたことを言語化し、共感すると、Aさんの怒りや疑いの表情はなくなり、AさんからMSSMをやろうと言い出した。

①Aさんの物語

モチーフ：「桜の花びら」くさくらもち
「エトスとバトス」くハンバーガー
「自己認識」く月をみるヘビ

(Figure 3.を参照)

尖った描線 エトスとバトス

(物語の中で出てくる人名、場所はAさんの中の架空のものである。)

「夜桜キレイですね」「ええ、もう少し早かったら、もっとキレイだったでしょうね」

松川さんは遠りよがちに笑って、僕の隣から前に移った。隅田川の夜桜見物は4月中旬がピークだ。僕の会社は隅田川から、二駅離れた場所にある。帰りの電車が一緒だった。それだけの理



Figure 3

由で松川さんは、僕を誘ってくれた。気があんの？あんのか？

「来月の定例会議のプレゼン、準備しました？」松川さんの振り向いた顔が、夜店のライトに映える。「いえ、黒田さんに投げっさりです」笑いながら答えると、松川さんも笑ってくれた。あんのか！やっぱり！！

すれ違った子供が、ビニール袋をぶら下げていた。何だろう？桜もち？そういや、今日の昼からの企画会議が長引いたせいで、何も食べちゃいなかったよなあ。買おうかなあ、何か(エトス)。「話題になる広告って言われても難しいですよ。今、同じチームになってる営業の人も、言うだけでなかなか」「うーん、あれですよ。引きつけるのとインパクトは似てて違いますよね」そう言いながらも夜店のハンバーガーが気になる。くそっ、何か本当に買おうかな。いいムードだけど、1回ピットインしとく？いや、待て待て、いやいや待て待て。ここで俺がハンバーガーでも買ったらどうだろう。松川さんが求めている俺とは、違うんじゃない？あるものも無くなっちゃうんじゃない？ここは我慢だ俺よ (パトス)、家に帰れば「スーパーカップ1.5倍プタキムチ」があるじゃないか。「月キレイですね」松川さんが小さく呟いた。つられて見合げると、彼女の言葉通り。キレイな月だった。バカみたいに腹の中で色々考えてた自分が嫌になる(自己認識)。月明かりと出店のライトに松川さんの黒いスーツとパールブルーのシャツが映えて、何だかフェティッシュだった。きっと松川さんは僕みたいに腹ん中でゴチャゴチャ考えないんだろうな。今夜の空気みたいに。澄んでるんだろうな。だんだん僕は、自分がずるい奴に見えて来た。「何か僕へビみたいですね…」「えっ？」「いや、何でもないです」隅田川の夜桜の門を、僕らはくぐって行った。

(4) 第4回目の実施状況

X年Y+1月Z+21日

Aさんは時間通り来室。筆者は、Aさんに今日で最終回であることを話す。Aさんは、笑いでごまかすような反応をし、情緒を隠すような感じであった。

①Aさんの物語

モチーフ：〈かめ〉「海辺に忘れられた水着」〈月の碑〉「ネガチョフとボジコフ」〈花を生けた花瓶〉「朝がこぼれる時」(Figure 4.参照)

尖った描線：ネガチョフとボジコフ

ほほに違和感を感じて起きると魚がはっていた。やあ、ここはどこ？何処かで海鳴りがする。空には大きなししがいる。明るく僕の世界を照らしている。ざらざらした手触りを感じながら、起きあがるとずっと遠くに海が見える。何処？



Figure 4

何処の海？どうやら丘の上に立っているらしい。海風が僕のホホをなでる。ちよらちよら丘を降りていくと、見たことのない石壁があった。大きいな、あれ。何だろ、何が映っているんだろ。ゆっくり近づこうとすると、つまさきが何かの感触をキャッチする。水着だった。青と黄緑が混じったような色。人がいるのかな。「めんどくさいな」僕の中のネガチヨフが呟いた。「そんなことないよ。人と知り合わなきゃ、ダメだよ」僕の中のポジコフが反論する。「いや、一人で何でも作れるよ」ネガチヨフが反論する。「一人で全部なんて、ムリムリ、沢山の人と知り合いましょう」ポジコフも反論する。どっちも僕さ。頭が痛くなる。考るのってしんどい。一つ一つ丁寧に考えるのってつかれる。でも、それしないと、僕は生きていけない。また足元が何かを見つめる。面倒だけど、拾ってしまう。嫌なのにしてしまう。花が入った花びんだった。誰のだろ？この人は誰か待ってたのかな。僕も誰か待ってるかな？ポジコフもネガチヨフもみんな好きになれるかな。東の空にぼっかり浮かんだ満月から、真っ赤な朝の雲（しずく）が真っ黒な海に落ちた。

*「ちよらちよら」…Aさんの出身地で使う言葉であるようで、特に意味はない。擬音語のようなもの。

Ⅲ 事例的研究についての全体的な考察

(1) アニマ・アニムスについて

考察に入る前に、簡単にアニマについて述べておく必要がある。アニマと密接な繋がりがあるアニムスもここで述べることにしたい。

アニマ (Anima)、アニムス (Animus) は、Jung, C.G. (1934) の元型論の中で述べられた代表的な概念である。アニマは、男性の無意識の中で活動している女性性や女性イメージである。男性は意識の中で、外界を男性として生きている。したがって、無意識の補償作用を考えると、無意識の中心には女性の心が存在することになる。その元型となっているのが、アニマである。Jung, C.G.によれば、無意識の中心にあるものは、外界の対象に投影されやすいという。したがって、男性の目の前にある女性が現れた時、その女性が無意識の中の女性像と一致すれば、その男性はその女性のことを即座に好きになるのである。つまり、男性の一目惚れというのは、アニマの投影によって起こるといえるのである。アニマの逆はアニムス (Animus) である。アニムスは、女性の無意識の中にある男性性や男性イメージである。無意識から立ち現れてくるものは、無意識とは異質な内容を備えている。アニマやアニムスは、意識と無意識とを架橋する。それが成功すれば、意識は、その偏りを異性的な無意識によって補償される。意識の中心としての自我が内界に適応していくには、このようにアニマやアニムスが必要なのである。

しかし、いつもアニマとアニムスが導き手として素晴らしい働きをしてくれるというわけではない。時にアニマやアニムスは自我をあやまった方向に導くこともある。アニマとはイメージであるので、このように実際の女性に投影されるが、感情的になって、怒り狂っている男性や、現実的な生活ができない男性というのは「アニマに取り憑かれている」という。また、女性が論理的な意見を声高にまくしたてている場合は、「アニムスに取り憑かれている」という（山中

1996)。山中（1996）も述べているが、筆者もアニマ・アニムスについてのJung,C.Gの考え方には、理解において未消化なところもあるが、全面的に肯定できないところがある。それは、男性はイメージ的なものが未分化で、女性はロゴス的なものが未分化であるというように、一面的に言うことができないのではないかと考えるからである。男性の無意識の中には男性と女性の心も存在し、女性の無意識の中にも両性の心が存在するのではないかと考える。アニマ・アニムスというのは、男女の性別によってはっきりと区別されるのではなく、一人の人間の中にはその両方が存在し、個人差や関係性の相違によって、たえずその表れ方変わってくると理解する方がよいのではないかと思う。Jung,C.Gがこのように考えたこと背景には、Jung,C.Gが育った時代のことも関係しているように思うし、西洋と東洋の違いもあるのかもしれない。この点は、今後もっと検討していく必要のある課題であるが、今回は性別の区別によらず、無意識の中に両性のイメージが存在することを前提として事例をみていくことにしたい。また、本事例でいうアニマは、比較的無意識の浅い領域でのアニマイメージについて述べたいと思う。

(2) 第1回目の考察

物語は、「誰かが待っている」と書いてあったように、Aさんのアニマについて考える必要があることを示唆するような物語になっていた。

物語についてのやりとりも、アニマに焦点づけた内容であった。Aさんは抽象的な物語を作り、非常に自分自身についての内面について考えようとする人であるように筆者は感じた。ヨットではなく「水面に映った」ヨットというところからAさんの心の内面が表されている。そして、それが貝の中にあるのである。貝はAさんにとって「なつかしい」ものであり、それは祖母なのである。祖母は女性であるので、これもアニマであろう。祖母はAさんのアニマを育てるために非常に重要な存在であったであろう。その貝の中にいた僕は、速くにある山から登ろうとしている朝日（赤）を見て、「そこに入りたい」という欲望が湧くのである。Aさんの話からも、その赤には「女性が待っている」のである。それは、「僕の心の中の女性」なのである。筆者はその女性像に光をあてようとするが、Aさんは「まだどんなのかわからない。」と話している。Aさんは、なつかしい祖母のもとを離れ、まだ見ぬアニマのところへ向かおうとしているのであった。今後のMSSMの見立てとして、Aさんのアニマがどのような人物なのかをAさんとMSSMを通して知っていくことであると筆者は考えて進めていくことにした。

(3) 第2の考察

#2でも「僕」が主人公として出てきているが、MSSMで投影されたモチーフの中にはない。尖った描線に投影されたモチーフは、「スタンドグラス」であり、これは、展示物のひとつである。またこれは、今回Aさんがインタビューの中で、自分の問題として語っていた「絶滅した鳥の羽」やアニマであろう「卵を抱える女性」へ「僕」を導くものであった。

Aさんのインタビューの中で、主人公の「僕」は「卵を抱える女性」を見るために博物館へ行ったが、「見てはいけないものだ」と思い、結局見ずに博物館を出てきたと話していた。物語の中でも、それを表現し、最後に博物館で買った「魚のストラップ」が「僕」のポケットから出て

揺れているという「卵を抱えた女性」を見たいがそのようにできないという「僕」の葛藤が見事に表現されていた。

#2のMSSMのやりとりの中で、Aさんは「筆者は、恋人がほしくないのか？」や「恋愛対象と思う年齢はいくつであるか？」など筆者に訊いていた。筆者はそれらの話しに対して丁寧に答え、Aさんに「僕ではないんですね…」と答えさせた。そのやりとりがあり、筆者はAさんに負担がかかっているように感じ#2では「尖った描線」を描くことを控えたのであるが、そのやりとりの直後にAさんから「尖った描線」を提示された。それに対して筆者は、いくつかのモチーフを連想させたが、#1にAさんは「尖った描線」に「水面に映ったヨット」を描いていることから「映るモチーフ」と、いろんな色があるものがよいと思い「ステンドグラス」を描いた。これらのやりとりの流れから「卵を抱える女性」というのは筆者であり「見てはいけない」と「僕」が思い、その場を立ち去っているとも受け取れるが、インタビューの中でAさんは「恥ずかしくて見てはいけないと思った。」とも述べていた。このことから、「卵を抱える女性」というのは、妊婦であり、出産のことを連想しているのかもしれない。

またAさんは「絶滅した鳥の羽」の連想から、インタビューと感想文の中で自分の問題に気づいている。次の括弧は、Aさんのインタビューの一部を抜粋し省略したものである。「…僕は、自分が変でありたいと思っているところがあるんです。普通だったら、羽は白いじゃないですか。でも、それは普通だから嫌なんです。…僕は凡人なのに、相手にそう思われたくなくて、変わった人だと思われたくてしてしまうところがあるんですよ。…無理して自分を大きく見せようとしていて、そんな自分に嫌悪感がある。」これは、筆者もAさんと初めて会ったときに感じたものに通じることである。Aさんは、無理している自分に気がついていて嫌悪感を感じていた。筆者は、Aさんにこのことに気がつけていることを褒め、ありのままの自分でも他者が受け入れてくれていると感じられるようになることが大切であることを話した。

また、#2からモチーフがひとつ増えている。これはAさんが自発的に「もうひとつモチーフを増やしたい。」と筆者に話してきたのである。理由は、交互に線を描いたり、絵を描きたらなさを感じていることと、絵を増やしてしっかりした物語を書きたいとのことであった。通常なら、筆者は断るのだが、Aさんの要望に応えることは、Aさんにとって自分のことを深く考えることになると感じた。筆者はAさんに「普通は5つの絵をつかって物語を描くルールになっているんだけど、Aさんはもっとしっかり物語を描きたいという気持ちが強くなってきているんですね。Aさんにとって絵を増やした方が描きやすいのであるならそうしてみましよう。」と話して、今回から6つのモチーフで物語を書いてもらうことになった。物語は別の画用紙に、筆者が黒のサインペンで枠を描き、その中に物語を書いてもらった。

(4) 第3回目の考察

#2にAさんからの要望で、1つモチーフを増やして、物語の枠を大きくしているので、#3の物語は非常に長い。筆者は、Aさんのエネルギーも考慮して枠の大きさを設定した。しかし、それでは書ききれず、Aさんは自筆で右側1/3あたりのところに線を引っ張り続きをかけられるようにスペースをつくった。内容は、#3の前に遭遇した出来事を引きずっていると感じ取れる

ような内容で、同僚の女性と「僕」が夜桜を見に出かけているところでのシーンでその女性が「僕」に個人的な感情があるのかどうか気になっているというものである。

今までは、「僕」の内的な部分でのアニメであり、ひとりでのやりとりであったが、#3では、現実的な女性へとアニメを投影させ、2人でのやりとりの中で「僕」が異性との付き合い方を考えている。またもう一つ重要な問題が、#3では出現している。それは、女性との関わりの中で、僕が腹の中で思っていることを見ていただきたい。彼女のことは置いておいて、物欲に走ろうとする「僕」(エトス)、物欲に走らないように引き留める僕(パトス)とのやりとりと、その両側面に気づき嫌悪感を感じる「僕」が物語の中で現れている。アニメとのやりとりの中で現れてきたこのテーマはAさんにとって非常に大きな問題であるように思う。ここでの問題は、#4でも出現される。

また、Aさんはインタビューの中でこのようなことについても話している。「僕は、松川さんが自分に気があるのかなのかということに揺れている自分が好きなんですよ。」この言葉を聞いて、筆者は、恋愛というよりも、ひとりで恋愛ごっこのような妄想遊びをしている少年を連想した。Aさんは20代前半で実際恋人もいるのであるが、まだ心は10代の少年のような未熟さを感じた。また、2人でお互いの情緒の交流を楽しめないAさんのしんどさをみたような感じになり、とても悲しくなった。この感情の動きは、筆者のAさんに対する逆転移にあたるのかもしれない。しかし、Aさんだけでなく、世の中の成人男性は、結構多いような印象があるのではないだろうか？筆者は逆転移であることを知った上で、Aさんに筆者が感じていることを伝えてみた。Aさんは「そうですね。」と返事をしたが、その返答をした時のAさんの表情は、とても寂しそうであった。

(5) 第4回目の考察

#4の物語も長い。最終回も「僕」を主人公にしている、アニメと思われる女性の水着をみつけるところから、「僕」の中にある「ネガチヨフ」と「ポジコフ」のやりとりが繰り返される。#3ではAさんは嫌悪感を感じると物語では書いていたが、今回は「ネガチヨフもポジコフも好きになれるかな。」という風に、どちらも「僕」であり、嫌いだと思う気持ちもあるが、これらの情緒をしっかり受け入れようとしている。これはAさんにとって良い変容である。これは、アニメの出現と関わりから、Aさんの問題が浮上し、Aさん自身で接し方や受けとめかたを考えたことになる。

Aさんは、#4で将来のことについて話している。Aさんは、公募の作品を出そうとしていることや、将来ライターになりたいとも話していた。Aさんは、このようなことは、社会に役立たないと思っているとも話した。筆者は、Aさんの挑戦については、ものすごいことだと思い、Aさんが頑張っていることを褒めた。将来の夢についても、社会に役立っていないと思う気持ちがあることについて詳しく話を聴き、役立っていないことについても話し合った。すると、Aさんの表情が軟らかくなり、突然のように「今日で最終回でしたよね…。寂しいですね。」と話した。来室当初は、情緒を見せないよう蓋をするような態度をしていたAさんであったが、将来のことを筆者が受けとめ、話し合ったことで、Aさんの感情面を筆者にみせても大丈夫であると思った

のであろう。ありのままの自分をみせても受け入れてもらえる体験をAさんはできたのではないかと思う。

(6) 全体的な考察

4回 のMSSMから、アニメの変容と、アニメとの関わりの中からAさんの問題が浮上し、その問題をどのようにして解決したかを述べてみたい。#1～#4でAさんが「尖った描線」に投影したモチーフは、物語では「僕」という主人公を表現したものになり、それらを主体的、能動的に物語に統合させている。#1から物語ではアニメが出てきている。しかし、#1の段階でのアニメは、非常に漠然としていて、どのような女性なのかAさんはわからないと述べた。#2では、Aさんは筆者に恋愛性転移を引き起こしているかのような発言があり、筆者はその転移を受け入れようとしなかった。その関係もあるのか、MSSMの物語では、主人公の「僕」はアニメであると考えられる「卵を抱えた女性」を見に博物館に向かったのだが、「見てはいけない」という気持ちになり、出て行ってしまふ。#3からAさんの強い希望で物語が長くなる。ここから、Aさんが、物語を描くことで、内的な自分のアニメとのやりとりを積極的に行おうとしているように筆者は感じた。#3では、現実的な女性にアニメを投影させ、その女性と「僕」との関わりの中から、「僕」の問題である2つの情緒側面の対話の中で「僕」が揺れ動かされ、嫌悪感を味わうことが出てくる。この嫌悪感は、「～したい」という欲求的なものと「～してはいけない」という理性的なものとの葛藤から出てきたものであり、また#2からAさんが気づいている「平凡な自分」を受け入れることも関係しているように思う。Aさんは、嫌悪感をしっかり味わい、#4では、2つの情緒も「僕」の中にあるもので、他の誰でもなく僕自身であることということや、「どちらのものも好きになれるかな」と物語で語っている。最終的には問題を「僕」自身のものであり、それらを受け入れようとしている。この態度は、非常に良いものである。このように出来たのは、アニメの変容や、Aさんが筆者とのやりとりの中で表出したAさんのアニメをAさんがしっかり感じ取れたことが考えられる。

Aさんのアニメイメージは、#1でも物語で表現されているように「待っている」ことができ、#3では美しいものをみて、素直に「綺麗ですね。」と言葉に出せる女性像である優しい女性像であるように筆者は感じた。これらの女性像は、Aさん自身の中にもあり、普段のAさんの言動でもよく表れている。#1にMSSMの後、教室の窓から見える夕焼け空に気がつき「空が綺麗ですね。」と筆者に教えてくれたり、難しい描線を提示し、筆者がモチーフを投影させようと苦戦している姿を静かに待ったり、おもしろい発言をして筆者を笑わせようとするAさんの優しさの部分でもあるように思う。

#1～#4のMSSMは、Aさんにとって非常に突りのある体験であったようである。筆者は、最終回にAさんに全体のフィードバックを行っており、その中でAさんは、「最初は自分の奥底にある見えないものを掘り起こして見ようとする感じがした。しんどかったが、僕にとってその作業はとて必要であると思うし、そうしないといけない気がした。しんどさはあったが、スリル感もあったし、とても楽しかった。4回試みて、もうできないと思うととても残念です。してきて、最初の頃の僕と今の僕は違う実感がある。今は、自分を出しても大丈夫だと思う。」と話

しているところからわかる。

IV 終わりに

今回は、1つの事例を取り上げて、MSSMの物語からみられるアニメの変容について検討した。今回の事例は、調査対象者が「尖った描線」を能動的に物語に統合できていた。#1～#4での4作品の物語は、「僕」とアニメのやりとりが現れ、その中で、調査対象者である「僕」の問題と積極的に向き合うことが出来ている。MSSMの「尖った描線」に投影したモチーフを物語の中に能動的に使うことが心理カウンセリング場面でのクライアントの心理的変容を促進させるために重要であることを示唆している。今回は主にアニメについての変容を重点的にみてきたが、カウンセリングではクライアントのアニメとアニムスを育てることが重要であると思う。どのような問題が浮上しても、クライアント自身で乗り越える力をつけることがカウンセリングには求められている。「問題を乗り越える力」というのは、クライアントの中に存在するアニメ・アニムスを育てることである。MSSMでのアニメとアニムスを育てるための導入方法を今後の課題として考えていきたい。

*Aさんの事例的研究で述べている内容は、個人のプライバシーに配慮し若干の修正を加えている。

謝辞

本論文の執筆にあたり、ご指導していただきました奈良大学教授の前田泰宏先生、友廣信逸先生、林郷子先生、貴重なご助言をいただきました京都文教大学教授の濱野清志先生、調査にご協力していただき、今回研究論文に載せることを承諾していただいたAさんに心より感謝申し上げます。

参考文献

- 藤内三加 (2007) MSSM (交互ぐるぐる描き物語統合法) における誘発線の機能についての臨床心理学的研究—青年期後期を対象とした実証的および事例的検討— 奈良大学大学院修士論文
- John A.Sanford (1995) 見えざる異性 創元社
- 河合隼雄 (1991) とりかえばや、男と女 新潮社
- 山中康裕 (1996) 臨床ユング心理学入門 PHP新書004
- 山中康裕編 (2003) 表現療法 49-66 ミネルバ書房
- 老松克博 (2004) 無意識と出会う アクティブイマジネーション理論と実践① トランスビュー
- 老松克博 (2008) ユング派における性：アニメとアニムス 367-372 臨床心理学8,3 金剛出版